歴史地理学　52－4（251）1-16　2010. 9

石橋五郎の歴史地理学と人文地理学

川　合　一　郎

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．歴史学への志向と地理学との接点
Ⅲ．歴史地理研究の開始
Ⅳ．雑誌『歴史地理』との関わり
　(1)『歴史地理』における初期論考
　(2)「勿来関」と「神戸港の今昔」の検討
Ⅴ．歴史的方法による人文地理学へ
　(1)「武庫附近集落の変遷」の検討
　(2) 歴史的方法による人文地理学の思想
Ⅵ．おわりに

Ⅰ．はじめに

石橋五郎（図１）は，明治40（1907）年に京都帝国大学に開設された日本初の地理学教室において，小川琢治とともに人文地理学の教育・研究に尽力した人物である。その著作・論文は必ずしも多くはないものの，近代人文地理学の体系や方法論の確立に努め，当時の学界や後進に大きな影響を与えた。近現代の地理学史においては，「アカデミー地理学」の創始者の一人と位置づけられている[1)]。

この石橋の地理学者としての出発点が，歴史地理学にあったことは比較的よく知られている事実である[2)]。石橋は東京帝国大学文科大学の史学科で学び，卒業後すぐに唐・宋時代における中国の貿易や貿易港に関する論文を発表したが，それは歴史地理的な内容を含む研究であった。また卒業後しばらくの間，雑誌『歴史地理』に国内の歴史地理的研究などを意欲的に発表している。

しかし石橋は，そののち歴史地理学からやや距離をおくようになり，過去の解明に重点をおく歴史地理学から，現在を知るために過去の地理を研究する立場へと研究領域を移していくこととなる。このように現在の地理を解釈するために過去の地理の研究を組み込む石橋の立場を，本研究では「歴史的方法によ

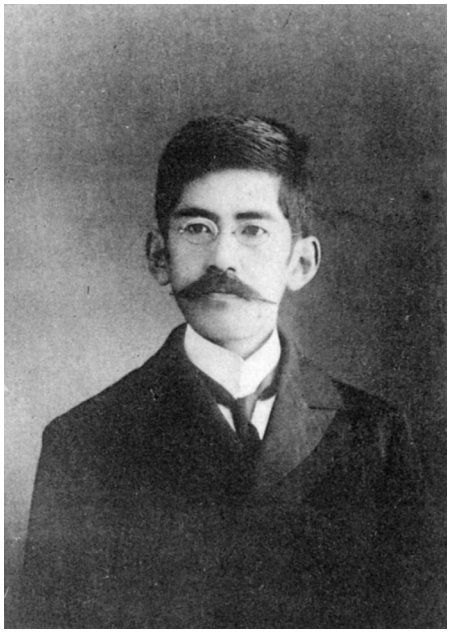

図１　石橋五郎の肖像
資料：東京地学協会編『地学論叢　第三輯』大日本図書，1908所収の写真を転載

キーワード：石橋五郎，歴史地理学，人文地理学，雑誌『歴史地理』，京都帝国大学地理学教室

る人文地理学」と呼ぶことにする。歴史地理学を主要な研究領域の一つとしていた初期の段階から，歴史的方法による人文地理学へと移行していった事実は，石橋が近代人文地理学を目指していく上で極めて重要な意味を持っていたと思われる。岡田は，近現代地理学者の個人史的研究を進める中で，一人の研究者の知的関心や研究業績は特定の研究分野にとどまらないことが多いとし，「学説史は，学界全体においてだけでなく，一研究者のレベルでも存在する」[3] と指摘しているが，石橋についても研究分野や学説の変遷が読み取れるのである。

石橋の地理学については，これまでも山口をはじめ吉田，織田，岡田，近藤など何人かの地理学者から論及がなされてきた[4]。また近年，京都大学文学部地理学教室から『京都地理学の百年』が刊行され，石橋の地理学が紹介されている[5]。しかし，これらはいずれも概観にとどまり，個々の業績に踏み込んだ，詳細な研究がなされているわけではない。このうち近藤の論文は，石橋に関する初めてのまとまった研究ではあるが，テーマは石橋の地理教育観であり，地理学そのものへの言及は必ずしも十分ではない。近代人文地理学の確立に大きな役割を果たした石橋の学問について検討することは，近現代における日本地理学史の全体像を解明する上で重要であると思われる。

そこで本研究では，石橋が主に歴史地理研究に取り組んだ時期，およびそこから歴史的方法による人文地理学に移行していった時期に着目し，その学説の変遷について考察を試みる。考察の対象とするのは，主として明治期における史学および地理学関連の論文・講演である。この検討を通じて，石橋地理学の実像の解明に迫ることとしたい。

Ⅱ．歴史学への志向と地理学との接点

石橋は明治 9（1876）年 1 月，石橋保國の長男として千葉県佐倉に生まれた[6]。幼少の頃から記憶力に長け，4 歳にして浄瑠璃を語り，6 歳で百人一首を全て暗誦していたという逸話が残っている[7]。長じて明治22（1889）年に千葉県尋常中学校（現，千葉県立千葉高等学校）[8] に入学し，同27（1894）年 9 月には，同年に第一高等中学校から改称したばかりの第一高等学校（現，東京大学教養学部）の大学予科第一部（文科）に入学した[9]。

石橋は一高在学中，教授の今村有隣より「政治地理」の授業を聴いており，地理学との接点はあったようである。しかし当時の高等学校における「政治地理」は，「各国の法制を主とせる政治誌といふべきものに過ぎなかった」[10] ようであり，後年，「之は地理と云ふものではなかった」と消極的に評価している[11]。後述するように，地理学への開眼は大学時代以降であり，この時代の石橋はむしろ歴史への関心が強かったようである。石橋は 3 年生当時，進学先として希望していたのは帝国大学の国史科であった[12]。結果的に進学したのは国史科ではなく，西洋史研究を中心とする史学科であったが，石橋の関心の所在を知る上で興味深い事実といえよう。

明治30（1897）年 9 月，石橋は東京帝国大学文科大学（現，東京大学文学部）史学科に入学した[13]。石橋が入学した頃の史学科は，すでに述べたように西洋史の考究を主体とする学科であった[14]。同期には，のち西洋史学者として大成した野々村戒三などがいる[15]。当時の史学科では，西洋史をはじめとして国史，中国史，西域史，歴史研究法，古文書学などの講義が行われていた[16] が，それと同時に，地理学の講義も行われていた[17]。石橋によれば，ドイツ人教師ルードウィヒ・リースから「自然地理」を，坪井九馬三から「政治地理」の講義を聴講したとのことである[18]。しかし「その地理学たるや実に失礼ながら申訳的のものに過ぎなかった」と感想を述べており，石橋の期待水準に到達するものではな

かったようである[19]。石橋の地理学への関心は，講義ではなくむしろ読書を通じて高められたようで，石橋の回顧によれば，志賀重昂の『日本風景論』や内村鑑三の『地人論』を読んで「大いに地理的興味を鼓吹」され，「益々地理学に興趣を覚」えたという[20]。

明治34（1901）年７月，石橋は「唐宋時代の支那沿海貿易並貿易港に就て」と題する論文[21]を提出して史学科を卒業[22]し，大学院に進学した。この卒業論文は専攻した西洋史に直接関わるものではなかったが，英，独，仏訳された９世紀以降のアラビア地理書に大きく依拠する，幅広い視点をもつ研究であった。石橋は大学院入学後，すぐにこの卒業論文を『史学雑誌』に３回に分けて発表している。この論文は，地理学に傾倒しつつあった初期の石橋の学問的傾向を知る上で興味深い論文でもあることから，以下においてその内容を詳細に検討することとしたい。

Ⅲ．歴史地理研究の開始

石橋の卒業論文「唐宋時代の支那沿海貿易並貿易港に就て」は，明治34年８月，９月，11月と３回にわたって『史学雑誌』に掲載された[23]。論文は大きく前半と後半に分かれ，前半が唐・宋時代の海上貿易の沿革や関連諸制度などに関する経済史的研究，後半が主要な貿易港に関する地名考証および沿革に関する研究である（表１）。石橋自身はその研究目的について「アラビア人（略）の支那沿海貿易に就て二三の研究を試み支那東南沿岸の諸港の盛衰に就て聊か述ふる所あらん欲す」[24]と述べている。

中国では唐代の８世紀ごろから，中国と西方諸国を結ぶルートが，中央アジアを経由する陸上交通から東南アジアを通じる海上路へと移行していった。宋の時代になると海上貿易制度の整備も進み，広州をはじめ明州，杭州，泉州などが南海諸国との貿易港として発展した[25]。石橋の論文は，海上貿易が発展していった唐・宋時代を対象に，それまであまり研究が進んでいなかった当時の海上貿易や貿易港の実態に迫るという野心的な研究であった。

この論文で特に注目したいのは，後半部分の貿易港に関する記述である。ここではイブン・フルダーズベやイドリーシー，イブン・バットゥータといった，９世紀から14世紀のアラビアの地理学者・旅行家が著した書物を取り上げ，そこに登場する中国の貿易港の地名や位置，沿革などについて考察を加えている。その意味で，この部分は本論文において

表１　論文「唐宋時代の支那沿海貿易並貿易港に就て」の構成

第一章　緒言
第二章　唐宋代に於ける海上貿易並貿易中心の移動
第三章　唐宋時代に於ける市舶司と征税法並に外国貿易と国家財政との干係
第四章　唐宋時代に於ける支那貿易港の地名考並其盛衰
第一　ルーキン（龍編）
第二　カンフ（広州）
其一　カンフの名義考
其二　広州の盛衰
第三　ザイヅム（泉州）
第四　ガンプ（澉浦）
第五　キンセイ（州）
第六　ジャンフ（楊州）及カンチュ（光州？）

資料：注23）

比較的歴史地理色が認められる箇所でもある。そこで，以下においては具体的に貿易港の事例を取り上げ，石橋の研究の特徴を探ることとする。事例としては，最も多く記述を割いているカンフ（広州）を取り上げることとする。

この広州に関する考察は，「カンフの名義考」と「広州の盛衰」の2節に分かれている。まず第1節のカンフ名義考は，いわば地名考証による現地比定ともいうべき内容である。アラビア地理書に見られるカンフという地名を，中国名の広州に当てる説と杭州に当てる説とを紹介しつつ，結論としては広州こそカンフであるとして，その根拠を述べている。石橋によれば，『旧唐書』地理志や『大唐西域求法高僧伝』などによると，唐代において広州は広州都督府の略称である「広府」と称されていたとし，それがアラビア地理書にカンフと音訳されて記されたとする。また，唐代の史料に見える貿易港は広州のみであり，仮にカンフが杭州であれば同時代の中国側文献に杭州が登場するはずであるがそれもないと述べ，むしろ杭州は宋代以降に発達した貿易港であるとしている。加えて，記録に見るカンフの物産や家屋の様式はいずれも現在の広州のそれと一致することなどを指摘し，カンフが広州であると断定している。この論述は，精緻な文献批判に基づく地名考証であるといえる。

続く第2節「広州の盛衰」では，諸史料に基づいて唐・宋時代における広州の沿革を考察している。広州は南海諸国に近く，天然の良港でもあったことなどから都市の起源は古く，すでに『漢書』地理志にはその記録が見られるとする。3世紀頃には外国の商船が来航しており，唐代の初頭に入るとアラビア人なども居住していたという。玄宗皇帝の開元年間（713年～741年）の頃には貿易事務を司る市舶司が設置され，市街地も発達し，唐末には貿易港として殷賑を極めるようになった。宋代においても南海貿易の盛行とともに繁栄を誇り，外国船も多数来航していたが，次第に北方の杭州や明州に繁栄を奪われて衰え始め，12世紀末になると全く衰退したという。史料によれば，この頃には広州に居住していたアラビア人も泉州に移住していったとしている。このように第2節は，いわば広州の都市史ともいうべき性格を有するが，考察の力点はあくまで広州の貿易港としての経済的地位の変遷にあり，その都市景観や地理的環境に関する記述はあまり多くは見られない。

以上，カンフ（広州）の事例を紹介したが，石橋はこのカンフ以外にも，アラビア地理書に登場するルーキン（龍編），ジャンフ（楊州），カンチュ（光州か）についても地名考証や港の沿革への考察を試みている。このうち地名研究については，後述する同時代の雑誌『歴史地理』にも見られ，当時関心を集めた歴史地理研究の一つであった[26]。この論文における地名考証は，藤田豊八や桑原隲蔵といった同時代の東洋史学者から注目されており[27]，その意味でこの地名考証は重要な意義を有していたと見ることができる。一方の貿易港の沿革に関する研究については，すでに述べたようにあまり地理的視角が見られず，必ずしも歴史地理的な研究になっているとはいい難い。それは広州に限らず，その他の貿易港の記述についても同様であり[28]，地名考証以外に歴史地理学的な要素はそれほどないのが実態である。

結論をいうならば，この研究は論文全体として見た場合，歴史地理的要素は含むものの，歴史学への志向が強い研究と位置づけるのが適当であろう[29]。研究手法についても，史資料の博捜とその綿密な検証に特徴があり，その意味で本研究は当時主流であった史料中心の実証主義歴史学の潮流に棹差したものであるといえる[30]。いわば史学科の卒論にふさわしい内容を備えている研究である。もっともこの論考において，リッター，リヒ

トホーフェンといった近代地理学者による中国に関する論述が引用されている点は注目に値する[31]。地理学への関心を，史学科在学中から色濃く有していたことをうかがわせるに足る事実である。また，石橋のライフワークの一つとなった貿易や港の研究[32]が，この時期に胚胎しているのも指摘しておきたい。

さて，石橋はこの論文を提出して史学科を卒業した後，「政治地理学」をテーマに大学院に進んだ[33]。大学院での研究テーマを地理学と定めた点について石橋は，すでに述べたように地理学への関心が高まりつつあったこと，さらに歴史研究が「断簡零墨のみを基礎として研究しなければならぬことが多かったので学問的研究の危険を感ずる所」があったのに対し，地理学は「到る所に材料があって自分自身の観察により研究」でき，「学究生活に安全であり且つ自分に適してゐると考へた(略)」ことが背景にあったという[34]。欧米に対して未発達であった日本の地理学界の状況も，石橋を奮い立たせる一因になったようである。また，すでに論じたように，卒業論文が「中世アラビア地誌に関連する研究」であったことも地理学を志す機縁の一つになったという[35]。なお，石橋は，大学院での研究テーマに地理学を掲げたのは自身が初めてであるとも述べている[36]が，すでに明治29（1896）年，文科大学国史科卒業の喜田貞吉が大学院での研究テーマに歴史地理を掲げている[37]。同31年にも，同じく国史科をおえた原　秀四郎が歴史地理をテーマに大学院に入学している[38]。喜田も原も日本歴史地理研究会のメンバーであり，会に関与していた石橋がこれらの事実を知らなかったとは考えにくいが，場合によると喜田や原の研究を地理学とみなしていなかった可能性もある[39]。

石橋は大学院入学後，活動の主要舞台を日本歴史地理研究会の機関誌『歴史地理』とした。以下において，同誌に掲載された論文に関する考察を試み，この時期の石橋の傾向を探ることとする。

Ⅳ．雑誌『歴史地理』との関わり

(1)『歴史地理』における初期論考

若き日の石橋が日本歴史地理研究会（後の日本歴史地理学会）の活動に関わってきたことは，これまでも何度か語られてきた[40]。この研究会は，文科大学国史科を卒業して当時大学院に在籍していた喜田貞吉を中核に明治32（1899）年10月に発足したもので，創設に関わったメンバーのほとんどが国史科の卒業生か在学生であった[41]。研究対象は，社寺や古城，古戦場などの歴史的遺跡から自然地理，古地誌・古地図，さらには今日の人文地理を意味する「政治地理」までも含む幅広いものであった[42]。石橋は国史科ではなく史学科の学生であったが，当時それほど歴史学関連の講座の学生数も多くなく，また両学科の共通科目があった関係で，双方の交流は多かったと思われる。石橋の同期には，藤田明，小林庄次郎，堀田璋左右といった国史科在学中の主要メンバーがおり[43]，こうした関係から創立時より同研究会に参加していったものと考えられる[44]。

石橋は大学院時代から，同研究会の機関誌である『歴史地理』に計12本の論考・記事を寄せている。このうち，明治40年の京都帝大地理学教室赴任以前，すなわち地理学の研究・教育に本格的に没入する以前の初期論考・記事は計９本ある[45]（表２）。そのすべてが歴史地理研究に関わるわけではなく，その分野は多彩であった。これらを分類すると，歴史地理研究，地理研究，歴史研究，その他の４タイプに分けられる。歴史地理的な研究としては「白河関及ひ勿来関」「勿来関」「神戸港の今昔」があり，なかでも「神戸港の今昔」は歴史地理研究として秀逸な内容である。地理研究に属する論考としては「地学雑談」がある。ここには「商業国と農業国」「都会及港の発達」「国境としての河流」「日

表 2　雑誌『歴史地理』における石橋五郎の論考（明治40年まで）

著者名	タイトル	巻号	掲載年月（明治）
石橋五郎	白河関及ひ勿来関	3-11	34年11月
桜台子	勿来関	4-1	35年１月
石橋五郎	聖徳太子十七條憲法評論	4-3，4-4，4-5	35年３・４・５月
三人同者	北遊笑談	4-3，4-4	35年３・４月
稲湖生	地学雑談	5-9，5-12	36年９・12月
稲湖生・関山生	北陸の物産（歴史つきの）	5-11	36年11月
稲湖生	高岡の銅器	6-1	37年１月
石橋五郎（抄訳）	地理学に対する支那人の観念	6-11，6-12	37年11・12月
桜台生	神戸港の今昔	7-10	38年10月

注１）「桜台子（生）」「稲湖生」はいずれも石橋の筆名。
注２）「北遊笑談」の筆名「三人同者」は，浮鴎（藤田　明），華峯（阿部　伝），桜台（石橋五郎）の３人を指す。
注３）「北陸の物産（歴史つきの）」は関山生（藤田　明）との共著論考。
注４）「地理学に対する支那人の観念」は「著名なる支那学者アイテル氏が曩に豪州地理学協会で演舌せられたるもの」（6-11，963頁）の抄訳である。
資料：日本歴史地理学会編『歴史地理　自第一巻　至第六拾巻　索引』，1933，205頁，（無署名）「石橋博士論著目録」地理論叢８（石橋博士還暦記念論文集），1936，1-4頁など。

本の地名研究」の４つのテーマが取り上げられているが，特に「商業国と農業国」「都会及港の発達」には，後年見られる経済地理研究の萌芽があらわれている。また，歴史研究に含まれるものとしては，「聖徳太子十七條憲法評論」「高岡の銅器」「北陸の物産（歴史つきの）」（藤田　明との共著）がある。最初のものは石橋の全業績の中でも異色であり，おそらく史学科在学中に国史関係の授業のレポートとして提出したものをまとめ直したものであろう。後二者は経済史・産業史的な論考である。その他に含まれるものとしては，中国研究者エルネスト・アイテルの講演の抄訳である「地理学に対する支那人の観念」と東北地方の史跡を探訪した際の紀行文である「北遊笑談」がある。

(2)「勿来関」と「神戸港の今昔」の検討

ここで歴史地理的論考である明治35(1902)年の「勿来関」と同38（1905）年の「神戸港の今昔」を取り上げて，この時期における石橋の地理学の特徴を検証したい。

まず「勿来関」[46] については，その内容を一言でいうならば，奥州三関の一つである勿来関（現福島県いわき市勿来町内）に関する名義考証と現地比定の研究である。この論考はその前年に発表した「白河関及ひ勿来関」の続編であり，「白河関及ひ勿来関」が紙数の関係からか白河関のみの論証に終わったため，論じ残した勿来関について考察を行ったものである。

この中で石橋は，この関はもともと土地の地名にちなんで菊多関と呼称されており，建置は５世紀前半にまで遡るとした。それが勿来関と称されるようになったのは９世紀後半ごろだという。この「なこそ」の原義について，石橋は「波越」と「勿来（来る勿（なか）れ）」の２説を検討している。「波越」説は『新編常陸国誌』が採るもので，かつての勿来関は大海に面しており，関所のある山の麓を波が洗っていたとする説である。石橋はこの説について，「海浜より十餘町の内地にして，百尺許の山上に在る」関所を波が越すはずがないとし，さらに関所のある一帯の海岸は岩石

で形成されていて有史以後に大きな隆起をしたと考えられないとして，この説を退けている。一方の「勿来（来る勿れ）」は，この関所が「常に蝦夷俘囚，或は夷囚等の内地へ入るのを防ぐ目的で設けられて居た」とし，畿内に近い古代三関（不破・愛発・鈴鹿）と異なって，蝦夷の侵入を防ぐ実質的役割が大きかったことから，その役割にちなんで「勿来」と呼称されるようになったと考えた。一連の論証の最後に，石橋は関所があったと思われる場所を現地観察した結果について記している。石橋は関所比定地に立って周囲の地形を観察し，その場所が西は「山岳連担」し，東は「直脚下が五六十尺の谿谷」に接する山道であることから，関所を設置するにふさわしい場所であると確信を深めている。

もう一つの「神戸港の今昔」[47] は，神戸港の歴史的変遷に関する研究を試みたものである。「神戸港の昔を語らんとせば即ち兵庫の昔に遡らざるを得ざるなり」として，神戸港の前身である兵庫港の歴史地理から説き起こしている。石橋は兵庫港が古代の務古水門に起源を有する可能性を指摘した上で，兵庫が大きく発展した契機を，承安 3（1173）年以降の平清盛による大輪田泊の修築であるとしている。この時，「神戸港の地形は大変動」を受けたとして，工事の概要と地形変化について詳述している。清盛は港近くの「塩槌山と称する一帯の小丘」を突き崩し，その土砂で「海岸三十餘町歩」を埋め立てるとともに，強い東南風によって発生する波浪が埋立地を侵食するのを防ぐために，防波堤的な役割を担う経ヶ島という人工島を築造した。また海水が逆流して氾濫が多かった湊川支流の逆瀬川については，新規に放水路を開削して氾濫を防止した。

その後，港は平氏の没落によって荒廃したが，鎌倉時代になると東大寺の僧重源によって大輪田泊修築が行なわれた。石橋は当時の兵庫について，兵庫を流れる「湊川の上流は現今の如き禿屹たる山々にあらずして，森林深く互り水量も随って夥しく直瀉」していたと述べ，湊川から海に流入する水量が夥しかったとする。ここに東南風による波浪が加わり，大輪田泊はかなり痛手を蒙っていたという。この重源による修築以降も港の修築や管理は継続して行われ，その機能は維持された。戦国期末になると城が築かれ市街地が発達して人家が密集し，それに伴って湊川の流路も付け替えられた。さらに，徳川氏の時代には大規模な船の所有者が多く，海運の拠点として大いに繁栄したとする。そして論文の最後に，慶応 3（1867）年に開港された神戸港の地理的範囲などについて簡単に触れている。

以上，この時期の石橋の歴史地理研究を，『歴史地理』に掲載された「勿来関」「神戸港の今昔」を事例に検討した。「勿来関」に見られる名義考証は，卒論「唐宋時代の支那沿海貿易並貿易港に就て」の地名考証にも一部通じるものがあるが，名義の解釈にとどまらず遺跡が立地する地形環境にも言及する[48] など，その考察には地理学的観点が強化されている。また，「神戸港の今昔」は，今日的な視点で判断しても優れた歴史地理的研究である。特に中世の大輪田泊に関する地形的環境や景観に関する記述は生彩を放っており，かつそれまでの石橋の論文には見られなかった地域の変遷を扱う視点が濃厚に見られる。この 2 編の論文からも，卒業論文に比べてより地理学的視点が強まっていることが分かる。

ただこの時期の石橋は，まだまだ歴史学とのつながりが強い時代であった。『歴史地理』に歴史の論考が掲載されていることからもそれが分かる。むしろ地理研究を，歴史を理解するための基盤として位置づけていた可能性すらある。それがうかがえるのが，明治37（1904）年の論考「地理学教授法」である。石橋は，教育の目的を果たすためには歴史を学ぶ必要があることを説いた上で，「真に歴史を明かにせんと欲せば更に人類に影響を与ふ

る所の四囲の状態即地理的原因を了解するを要す」として地理学の教育的意義を指摘している[49]。このような歴史学と親縁性の強い歴史地理学は，のちに石橋が確立することとなる，現在の地理を知るための過去の地理という視点とは異なる。山口はこの時期の石橋を，『歴史地理』に拠る「歴史的地理学派」に含めている[50]が，すべての面で『歴史地理』の他のメンバーと同一の考え方であったかは留保する必要があるにしても，正鵠を得ている面があるといえよう。

次章においては，過去に力点をおく地理に関心を有していた石橋が，その後どのように研究方法を変化させていったかについて論及したい。

Ⅴ．歴史的方法による人文地理学へ

(1)「武庫附近集落の変遷」の検討

明治37（1904）年４月，石橋は神戸高等商業学校（現，神戸大学）教授として赴任して商業地理などを担当した[51]。前章でみた「神戸港の今昔」は，神戸高商赴任の翌年に発表されたものであった。さらにその翌39年，石橋は「自然ト経済トノ関係」と題する研究を『国民経済雑誌』に発表した[52]。ここで石橋は，地理学を「地ト人トノ関係」の科学と考え，特にドイツの地理学者フリードリッヒ・ラッツェルを近代人文地理学の到達点と評価しており，初めて本格的に人文地理学を論じた内容として注目される[53]。石橋がのちに提唱した地人相関論[54]の萌芽が見られるのも興味深いところである。また，明治40年４月には東京地学協会で「港の盛衰」と題する経済地理に関する講演[55]を行なっており，着実に地理学研究を進めつつあった。

明治40（1907）年10月，石橋は神戸高商教授と兼務で，京都帝国大学文科大学（現，京都大学文学部）史学科に設置されたわが国初の地理学講座（正式には史学地理学第二講座）に初代の助教授として招かれた[56]。初代教授に招かれたのは，帝国大学理科大学（現，東京大学理学部）地質学科卒で当時農商務省の地質調査所に勤務していた小川琢治である。ここで石橋は人文地理学の講義を担当することとなったが，この話が突然であったこともあり講義内容の編成に苦心し，「昼夜兼行ラッツェルのアントロポゲオグラフイ（『人類地理学』―筆者注）を精読し，之を基礎として兎に角人文地理学の体系を建てた」[57]という。

慌しく京都帝大に着任した翌明治41（1908）年秋，石橋は「武庫地方に於ける集落の変遷」と題する講演を行った[58]。この講演内容は，ラッツェルの代表的著作『人類地理学』の集落地理的な考察に大きな影響を受けたものとされる[59]が，それまでの石橋が取り組んできた歴史地理学と人文地理学とを統合した，新たな展開を示す内容として注目される。一言でいえば，それは歴史的方法による人文地理学である。その研究主眼はあくまで現在の地理の解明にあり，過去の地理の考究は現在の地理を明らかにするために行うという手法である。いわば，現在を知るための過去の地理というスタンスといえる。のちにこの講演の内容は，小田内通敏編集で発行された『都市と村落』に「武庫附近集落の変遷」とのタイトルで収録されており[60]，以下においてこれに基づいて講演の内容を検討することとする。

この講演の中で石橋は，集落は歴史的関係および地理的関係により変遷すると指摘し，これを形態の変遷，位置の変遷，分布の変遷，道路の変遷の４つに分類した。その上で武庫附近，すなわち西宮周辺の集落を事例に，その変遷のありさまを考察している。まず石橋は，六甲山の麓に集落が少なく平野部に多数の村が分布している現在の状況に言及し，その原因を，六甲山がはげ山のため生産活動に適さず居住が困難であったのに対し，平野は地味肥沃のため多くの集落が誕生したと考えた。しかし『和名類聚抄』の郷名など

から，往古は現在と異なってむしろ逆に山麓において集落が発達していたとした。なぜ集落が山麓から平野部に移動したかについて石橋は，元来六甲山には森林が繁茂していたが，次第にはげ山になり，一方で山からの土砂の供給で平野が拡大してきたため，現在のように山麓から平野部への集落の立地移動が見られたと考えた。

石橋はさらに，この土砂の供給による平野の拡大は，集落の平面形態に影響を与えたと考えた。現在の西宮附近では，集落は南北に長い形態のものが多いが，元禄期の古図によれば，西宮は東西に長い集落として示されている。このように東西方向から南北方向に変化したのは，土砂の供給により土地が次第に南に拡大し，それに伴って集落が南に延びていったためと指摘した。また，現在の集落内・集落間の道路について見ても，東西路は断続的で小さく，南北路は一貫的で大きいとし，これは拡大する土地を住民が利用しようとして道路が南に延長されたのが原因と考えた。村々がこの南北路に沿って立地するのも，本村の南に新たに支村が成立していったためと解釈した。

最後に，海岸部に西宮などの都市的な集落が立地しているのは，直接的には海岸部に発達した酒造業が要因と考えた。一方，内陸部の村々は街村をなさず小村の状態にあるが，これは海岸部に人口が密集して都市的な集落が発達したため，その影響で内陸部の村々が今のような純粋の農村へと変化していったと推定した。

以上，「武庫附近集落の変遷」の内容を論じてきたが，この中で石橋は，いずれも現在の地理を考察の出発点とし，その地理的様相を説明するため，または理解を助けるために，過去の地形状況や人文条件に言及するという手法を採用している。この講演の最後に石橋は，次のような興味深い発言をしている。

> 以上は武庫附近の集落に就き純人文地理学の見地から観察したもので，一小地方に於ける集落の人文地理的研究の試みとして此の研究をなしたのだが，更に之を歴史地理の見地からすれば一層興味あることと信ずる[61]。

すなわち，この研究は「歴史地理」ではなく「純人文地理学」の研究であると断言しているのである。この「純人文地理学」とは，現在の地理的事象の説明を目的とする人文地理学，という意味であろう。この講演内容は，それまでの石橋が取り組んできた過去に力点のある歴史地理とは明らかに異なっており，視点はあくまで現在地理にある。

石橋自身，この講演にはかなりの自負があったと見え，後年，次のように回顧している。

> その秋（明治41年秋―筆者注）大阪経済雑誌社の主催で西宮附近の歴史地理の講演会が催された。その時小川教授（小川琢治―筆者注）は武庫附近の地形に就いて話され，自分の演題は「武庫地方に於ける集落の変遷」と云ふのであつた。この講演は恐らく我が日本に於て純地理学の最初の公開講演であつたと思ふ[62]。

石橋としては，この講演が日本の（人文）地理学の発展に大きな意義があったと自負していたのであろう。石橋の教え子の一人である米倉二郎は，この講演について次のように力を込めて論評している。

> この歴史学の為の地理（雑誌『歴史地理』に見られる歴史地理研究―筆者注）を，地理学の為の歴史となし，地理学的歴史地理学建設へのコペルニカス的転向の役割を為したものは喜田博士の同窓として同じく「歴史地理」の同人であらせられた我が石橋先生の，武庫附近に於ける集落の変遷，とそれに相次いで公にされた小川先生の越中の散村，大和の垣内式村落の研究であつた[63]。

石橋の論文を小川の論文とともに「地理学的歴史地理学」と表現していることは興味深いが，いずれにせよ米倉は，この論文が恩師石橋にとって「地理学の為の歴史」に向かうターニングポイントとなった点に着目しているのである。

この講演以降，石橋による『歴史地理』への投稿が終息することは示唆的でもある[64]。冒頭に述べた「自然ト経済トノ関係」が発表された明治30年代末から「武庫附近集落の変遷」の講演が行われた40年初頭は，石橋地理学の骨格が形成された重要な時期であった。すなわちそれは，歴史地理学を主要な研究領域の一つとしていた段階から，歴史的方法に基づく人文地理学へと移行していった時期でもあった。

(2) 歴史的方法による人文地理学の思想

石橋が「武庫附近集落の変遷」で展開した地理学方法論は，その後の研究にも随所に見られる。例えば昭和 3 (1928) 年の論文「九州地方聚落の人口地理的考察」では，現在の人口地理の状況を説明するために，歴史的考察を重視している。石橋は九州地方の市町村の面積，人口，人口密度について，それを決定する要因は自然条件と人文条件であると述べ，自然条件としては主に気候，地形，地質を，人文条件としては歴史的制度，産業を取り上げている[65]。このうち歴史上の制度について石橋は，8 世紀初頭の国郡里制や近世薩摩藩の外城制度などの諸制度が，集落の面積や人口などに大きな影響を与えたと考えている。いうまでもなくこの歴史的考察は，現在の人口の地域的状況を説明するための観点であって，歴史人口地理学ではない点は注意する必要がある。

昭和 7 (1932) 年の『地理論叢』第一輯に掲載した「我が地理学観」でも，石橋は人文地理学の歴史的方法の重要性について強調している。

> 今日の所謂人文景観と称するものゝ人事事象はその大部分が過去人の所産である。之れその人文事象と地との関係を考ふるに当つてはこの人文事象を説明する歴史を閑却し能はざる所以である（以下略）[66]

現在における「人事事象」の大部分は「過去人の所産」であり，それゆえ現在の「人事事象と地との関係」を理解するためには歴史的考察が欠かせないことを指摘している。ここで留意すべきは，石橋の関心があくまで現在の「人文事象」の説明に注がれている点である。また同12 (1937) 年の地理学講座の一冊である『集落地理学』でも，同様の考え方が示されている。

> 文化の歴史的発展段階の研究が，やがて現在の地理的に分布を有する現象の解釈に参考になるところが決して少くないのである。集落地理の史的研究は現在の集落の解釈に大なる寄与をなすものである[67]。

ここでも石橋は，集落の史的研究が現在の集落地理を説明するための手法であると位置づけているのである。

以上のように石橋は明治40年初頭以降，歴史地理学を主要な研究領域の一つとしていた段階から，歴史的方法に基づく人文地理学に移行していったが，その根底にはどのような思想があったのだろうか。憶測の域を出ないが，恐らくは日本歴史地理研究会（日本歴史地理学会）が機関誌『歴史地理』で展開した歴史地理研究に対し，石橋が不満感を抱いていたためと思われる。石橋は次のように述べている。

> 元来この学会は一般歴史家の団体であつたから，その主要な仕事はどこ迄も歴史の行はれたる舞台としての地理の考証で，歴史のために存する地理であつた[68]。

近代人文地理学の体系を整備していた当時の石橋にとって，いわば従属関係にあった歴史

学からの独立は必須であったように思われる。また欧米での隆盛に比して著しく立ち遅れの感のあった日本の地理学の発展は，東京帝大時代からの宿願であった[69]。「歴史のために存する地理」を脱却して地理学を独立科学とするために，歴史が過去を扱うのに対して，地理学の主な対象をあくまで現在の空間とし，歴史学との明確な差別化を図ろうとしたのではないかと推測できる。昭和12（1937）年に刊行した地理学講座の一部である『人文地理学概論』において，石橋は次のように述べている。

> 人文地理学において社会と自然との関係を説く場合に人類の歴史的研究は重要な意義を有つが，注意すべき事は人文地理学は地理に関する歴史的過程そのものを説明するものではない事である[70]。

石橋は歴史地理学そのものの存在を否定したのではないと思われるが，「地理に関する歴史的過程そのもの」を考察することが，『歴史地理』流の「歴史のために存する地理」になることを危惧したのではないかと思われる。史学科出身で，その出発点を『歴史地理』においていた石橋だからこそ，地理の歴史に対する従属を警戒したのではなかろうか。ともすれば歴史学に包摂されることの多かった歴史地理学からやや距離をおいたのは，このような思いが背景にあったと推測される。

以上，石橋の人文地理学について詳細に論じてきたが，この章の最後に，ここまであまり紹介できなかった大正期以降の石橋について簡単に触れて本章を終わることとしたい[71]。石橋は大正８（1919）年９月，神戸高等商業学校教授を兼務のまま京都帝国大学の教授に昇進した[72]。同10年に京都帝大理学部に地質学教室が開設され，小川がその主任教授に転出すると，石橋は小川の後を襲って翌11（1922）年８月に京都帝大地理学教室の主任教授となった。しかし大正末年頃になると病気がちな日々が続き，思うように執筆や教育活動が行えない時期もあったようである。昭和４（1929）年に京都帝大に入学した織田武雄は後年，「石橋先生は非常に聡明な先生だったですが，非常に身体が弱かった。ものをほとんど書くことが少なかったようであります（略）」[73] と回顧している。織田は入学前から，石橋は休講が多いとも聞いていたようである[74]。それでも石橋は，昭和11（1936）年に京都帝大を定年退官するまで精力的に後進の指導に当るとともに，『日本地理風俗大系』（本巻18，別巻１），『世界地理風俗大系』（本巻25，別巻２），『日本地理大系』（本巻12，別巻５）などの地理大系の編集，地理学講座として最初で最大規模の『地理学講座』（全16巻）の監修などに携わった。没したのは昭和21（1946）年４月，享年71歳であった[75]。

Ⅵ．おわりに

本研究では，近代人文地理学の開拓者の一人である石橋について，その地理学研究における学説上の変化を代表的な業績を事例にあげつつ論じてきた。石橋は東京帝国大学で史学を学び，その関係から歴史地理学を主要な研究領域の一つとしていたが，明治40年代初頭から歴史的方法による人文地理学に転じた。それはいうならば，石橋の地理学の重心が「過去」から「現在」に移動したということに他ならない。その背景には，地理学の独立性を確保するため，歴史学に従属しやすい歴史地理学から自ら進んで離れたという事情があったのではないかと推測した。

以上のような検討は，石橋の人文地理学の思想やその学史的な意義を明らかにする上で，いささかなりとも寄与するのではないかと考える。とはいえ本研究は，主に明治後期における石橋の研究動向に着目した試論的な考察に過ぎない。石橋地理学の全体像を明らかにするためには，当然ながら「武庫付近集落の変遷」以降の論文をも重点的に論ずる必

要があろう。特に，前に触れた『日本地理風俗大系』，『世界地理風俗大系』，『日本地理大系』などの地理大系シリーズは検討に値すると思われる。これらのシリーズは，石橋自身が「必ずしも学術的意義を有するとは云へない」[76] と述べているとおり，どちらかというと一般向けの啓蒙書であったが，石橋地理学の特徴が如実に表れていて興味深い。例えば『日本地理大系』における石橋らの論考「近畿地方の人文地理」では，近畿という地域的単元の意義や人文的特色，さらに人口分布，都市・村落などについてふんだんに歴史的方法を用いて記述している[77]。石橋は「時ありては歴史的説明が地人相関の解釈の大部分を占むるのである」[78] と指摘しているが，歴史地理から距離をおいたとはいえ，石橋にとって歴史的なものの見方は極めて重要であったことがわかる[79]。史学科出身の石橋ならではといえよう。大正期から昭和期にかけての論考についての考察は，今後に期することとしたい。

（日本たばこ産業(株)，
早稲田大学・教育学研究科・院生）

〔付記〕
本稿を作成するにあたり，早稲田大学教育・総合科学学術院の宮口侗廸先生から貴重なご教示をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

〔注〕

1）岡田俊裕『日本地理学史論―個人史的研究』古今書院，2000，32-33頁。

2）①藤岡謙二郎『浜田青陵とその時代』学生社，1979，64-65頁，②吉田敏弘「史学地理学講座における近代人文地理学導入の系譜」（京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房，1982），201頁，③岡田俊裕「解説」（同編『日本の地理学文献選集（Ⅰ）―近代地理学の成立前夜―　第９巻　牧口常三郎』クレス出版，2007），7-8頁など。なお岡田は，石橋を近代地理学の成立前夜における歴史地理学者の一人に数えている。

3）前掲1）14頁。

4）①山口貞雄『日本を中心とせる輓近地理学発達史』大明堂，1983（初版1943），133-134頁，②前掲2）②192-205頁，③織田武雄「石橋五郎」（日本地誌研究所編『地理学辞典　改訂版』二宮書店，1989），18-19頁，④前掲1）32-33頁，⑤岡田俊裕『地理学史人物と論争』古今書院，2002，24-26頁，⑥近藤裕幸「旧制中学校の地理科教科書を通してみた石橋五郎の地理教育観」人文地理57-5，2005，459-478頁。

5）京都大学文学部地理学教室編『地理学　京都の百年』ナカニシヤ出版，2008，62-63頁。

6）勝田　一編『帝国大学出身名鑑』校友調査会，1932，イ（ヰ）97頁。前掲4）③18頁。

7）瀧本貞一「石橋博士のプロフィル」地理学談話会会報３（石橋博士還暦記念特輯），1936，40頁。

8）千葉県立千葉中学校『千葉県立千葉中学校一覧』，1903，103頁の明治27年３月の卒業生欄に，「東京帝国大学大学院学生　文学士石橋五郎」と名前が記載されている。なお，当時の校名については同書3-9頁の「沿革略」で確認。

9）①石橋五郎「我国地理学界の回顧」地理論叢８（石橋博士還暦記念論文集），1936，3-4頁。また，②第一高等学校『第一高等学校一覧　自明治二十七年　至明治二十八年』，1895，125頁の「一部一年四之組（文科）」（明治28年２月時点）に，石橋の名前が確認できる。

10）前掲9）①3-4頁。

11）前掲9）①４頁。なお，石橋五郎・別技篤彦『地理教育論（現代教育学大系　各科篇　第十三巻）』成美堂書店，1937，196頁にも同様の記述がある。

12）第一高等学校『第一高等学校本部一覧　自明治廿九年　至明治三十年』，1897，105頁の「一部三年五之組　文科」（明治29年11月時点）を見ると，石橋の名前の上に記載された志望学科が「国史」となっている。恐

らく何らかの心境の変化で，3年生の1年間で国史科から史学科に変更したのであろう。

13）東京帝国大学『東京帝国大学一覧　従明治三十年　至明治三十一年』，1897，418頁の史学科第一年（明治30年10月時点）に石橋の名前がある。

14）永原慶二『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館，2003，33頁。

15）東京帝国大学『東京帝国大学卒業生氏名録』，1926，256頁。

16）当時の史学関連講義の題目は，毎年『史学雑誌』の10号または11号に掲載されており，それを参考にした。ただし石橋在学期間のうち，入学年度の明治30年の講義題目の記事だけは管見の限り見当らない。

17）明治26（1893）年の講座制導入に伴って史学科に設置された講座は「史学地理学講座」という名称であり，地理学とも縁のある学科であった。東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史　部局史一』東京大学，1986，420頁。

18）前掲9）①6頁。なお，石橋は別の記事で「人文地理実は歴史地理を坪井九馬三先生より，自然地理を外国教師のリース先生より聴いた」と述べ，坪井の講義内容を「歴史地理」と表現している。石橋五郎「史学科創立当時の回想と地理学科」（京都帝国大学文学部『京都帝国大学文学部三十周年史』，1935），206-207頁。

19）吉田はリースと坪井の地理の講義について，リースの講義については初歩的な地学であったとしつつも，坪井の地理学はラッツェルに基づく近代的な内容であったと指摘している。その上で吉田は，石橋のこのコメントを，両者の講義に関する感想というよりは，当時の地理学の水準に対する批判的言辞であるとしている。前掲2）②193頁。

20）前掲9）①4頁，6頁。なお，石橋はもともと旅行好きで，地理学への志向性を潜在的に持っていたと考えられる。前掲9）①6頁。

21）石橋は自身の回顧録などでも卒業論文のタイトルを明示していないが，Ⅲ章でも触れるように，卒業論文は「中世アラビア地誌に関連する研究」であったとしている。この後の本文でも詳しく述べるが，卒業直後に『史学雑誌』に掲載した論文「唐宋時代の支那沿海貿易並貿易港に就て」はアラビア地理書を多用しており，タイトルが厳密に一致するかどうかは議論の余地があるものの，ここでは卒論と見なした。

22）前掲15）256頁。

23）石橋五郎「唐宋時代の支那沿海貿易並貿易港に就て」史学雑誌12-8，1901，952-975頁，12-9，1901，1051-1077頁，12-11，1901，1298-1314頁。

24）前掲23）953頁。

25）張　祥義「宋代市舶司貿易研究の現状と課題」亜細亜大学教養部紀要，1981，33-34頁。

26）例えば，明治36（1903）年刊行の『歴史地理』第5巻第1号から第11号では，「地名研究」という項目が設けられて多くの論考が掲載されている。

27）藤田や桑原の著書には，石橋論文への言及が少なからず見られる。藤田豊八著，池内宏編『東西交渉史の研究　南海篇』岡書院，1932，179-255頁，桑原隲蔵『東西交通史論叢』弘文堂書房，1933，395-521頁，同『蒲寿庚の事蹟（東洋文庫509）』平凡社，1989（初版1935），36-77頁など。

28）広州以外の貿易港についても若干地理的叙述は見られるが，初歩的な考察の域を超えていないように思われる。例えば泉州について見ると，その発展の背景を「泉州辺は封彊狭隘にして土地磽确なり故に人民等は晏然として天賦の産物に頼ること能はずよりて諸般の工芸品を製造し之を他の地方に輸し以て利を占め居たり」としており，地理的な条件に対する分析視角が見られるものの，後年の石橋の精緻な地理的考察と比較すると初歩的な内容にとどまっている。前掲23）1300頁。

29）石橋自身はこの卒業論文を「経済史」の研究と位置付けており，当時文科大学講師であった経済史学者の内田銀蔵の影響が大き

かったとしている。石橋五郎「内田先生の追憶」芸文10-10，1919，972頁。なお，この内田銀蔵は明治40年の京都帝国大学の史学科創設に際し，地理学を独立講座とするにあたって大きな役割を果たした人物で，石橋を京都帝大に招いた人物でもある。前掲2）②202-203頁。

30）わが国では明治20年から30年にかけて，伝統的な史料中心の考証史学とヨーロッパ近代歴史学の厳密な史料批判とが結びついて，実証主義的な歴史学が成立していた。大久保利謙『日本近代史学の成立　大久保利謙歴史著作集７』吉川弘文館，1988，54-55頁，前掲14）73頁。

31）前掲23）955頁，1058頁，1061頁。

32）例えば①石橋五郎「港の盛衰」（東京地学協会編『地学論叢　第三輯』大日本図書，1908），403-433頁，②同「明治年間の外国貿易額に就いて」国民経済雑誌36-6，1924，1-17頁など，石橋の業績には港湾や貿易に関する研究が少なくない。

33）前掲9）①６頁。①東京帝国大学『東京帝国大学一覧　従明治三十四年　至明治三十五年』，1901，409頁の「大学院学生（文科学生）」（明治34年９月末時点）には，「政治地理学　文学士　石橋五郎」とある。なお，この「政治地理学」は，今日いう「政治地理学」ではなく「人文地理学」とほぼ同じ意味合いであると考えられる。久武は，人文地理学という用語が定着する時期（明治36年～41年）以前は，政治地理学や人事地理学，文明地理学などの用語が今日の人文地理学と同義に用いられたことがあったと論じている。②久武哲也『文化地理学の系譜』地人書房，2000，410-418頁。

34）前掲9）①６頁。

35）前掲9）①６頁。

36）前掲9）①６頁。

37）喜田の研究テーマは「本邦歴史地理（特ニ畿内地方）」であった。帝国大学『帝国大学一覧　従明治廿九年　至明治三十年』，1896，322頁。

38）原の掲げたテーマは「国史科中本邦歴史地理特ニ東国地方ニ関スル事項」であった。東京帝国大学『東京帝国大学一覧　従明治三十一年　至明治三十二年』，1898，364頁。

39）石橋が日本歴史地理研究会の提唱する歴史地理研究をどう見ていたかは，Ⅴ章（2）節で触れる。

40）前掲2）②201頁，前掲4）①120頁など。

41）会の発起人は10名で，原　秀四郎，星野日子四郎，大森金五郎，岡部精一，喜田貞吉が国史科卒業生（文学士），堀田璋左右，栗田淳綱，藤田　明，小林庄次郎が在学中，熊谷直一郎が國學院（現，國學院大學）卒業生であった。

42）川合一郎「明治・大正期における雑誌『歴史地理』―同時代の研究者による評価を中心に―」歴史地理学48-4，2006，21頁，34-37頁。なお，この「政治地理」には，行政界や都市・交通路・港津，人口，産業に加え，「地理と文明との関係」という研究項目まで含まれており，今日でいう人文地理学を意味していたと思われる。前掲33）②参照。

43）前掲15）251頁。

44）石橋自身，「自分も当時文科大学史学科の学生であったがその最初より之（日本歴史地理研究会―筆者注―）に関係した」と述べており，創立期の日本歴史地理研究会の会員名簿にも石橋の名前が見られる。前掲9）①５頁，「日本歴史地理研究会々員名簿」歴史地理2-3，1900，附録。また，石橋は史学科卒業年の明治34年7月，弘前城や中尊寺金色堂などの東北各地の史跡探訪を研究会の創設メンバーの一人である藤田　明などと行っており，この時期の石橋の研究会への関与ぶりが分かる。三人同者「北遊笑談」歴史地理4-3，1902，290-293頁，4-4，1902，397-400頁。

45）京都帝大赴任以降の論文・記事は，以下の３本である。石橋五郎「地理学及其分科の名称に就きて」歴史地理11-1，1908，47-51頁，同「第二回郷土保存万国会議状況報告」歴史地理20-5，1912，503-508頁，同「史界に於て等閑に附せられたる研究方面と特に研究の必要ある事項」歴史地理37-6，1921，493頁。最初の論考は，『歴史地理』100号記

念号の特集「百名家論集」への寄稿である。2つ目のものは，もともと文部省に提出し，その後官報に掲載された第二回郷土保存万国会議の出席報告書であり，それが『歴史地理』に転載されたものである。この点については，石橋五郎「郷土保存に就いて」（史学研究会編『史的研究』冨山房，1914），234頁を参照のこと。最後のものは，浜田耕作（考古学）や喜田貞吉，石橋など11人の有識者に，歴史学界における研究上の課題について意見を求めたものであるが，石橋のコメントは箇条書きでわずか3行に過ぎない。

46）桜台子「勿来関」歴史地理4-1，1902，口絵，37-43頁。

47）桜台生「神戸港の今昔」歴史地理7-10，1905，883-886頁。

48）「勿来関」の前編である「白河関及ひ勿来関」においても，「白河の関は，果たして如何なる地形によれるものなりや，之れ吾人が聊か記載を要する所なり」と述べ，関の立地する地形環境を詳細に記述している。石橋五郎「白河関及ひ勿来関」歴史地理3-11，1901，803-805頁。

49）石橋五郎「地理学教授法」（堀田璋左右・村川堅固『新訂　外国地理講義　全』吉川弘文館，1904），6頁。なお，石橋は同じ論文の10-11頁でも，「（地理的知識があれば―筆者注）歴史上のいかなる事実も其現在と過去と古代と近世とを問はず直に其場所を定め得るなり，此の事件と場所とを結び付ることは更に時の観念を定むるの主要なる方法にして，歴史の智識はかくの如くして成立せん」とも述べており，歴史理解に地理が役立つことを指摘している。

50）前掲4）①120頁。

51）前掲9）①7頁，神戸大学百年史編集委員会編『神戸大学百年史　通史Ⅰ　前身校史』神戸大学，2002，103頁。なお，神戸高等商業学校『神戸高等商業学校一覧　自明治三十七年五月　至明治三十八年四月』，1904，46頁の「教授」欄には，「倫理，商業道徳，商業地理　文学士　石橋五郎」と記載されている（記事は明治37年7月時点）。

52）石橋五郎「自然ト経済トノ関係」国民経済雑誌1-4，1906，51-78頁。

53）前掲2）②201-202頁。

54）石橋五郎「我が地理学観―発刊の辞にかへて―」地理論叢1，1932，6-9頁。

55）（無署名）「学術講話会」地学雑誌19-221，1907，345頁。この時の講演内容は翌明治41年に発表されている。前掲32）①。

56）①前掲9）①12頁，②石橋五郎「教室回顧三十年」地理学談話会会報3（石橋博士還暦記念特輯），1936，1頁，③京都大学文学部『京都大学文学部五十年史』，1956，180-181頁。なお，京都帝国大学『京都帝国大学一覧　従明治四十年　至明治四十一年』，1908，73頁の「助教授」欄には「地理学（神戸高等商業学校教授）　文学士　石橋五郎」とある（記事は明治40年10月末時点）。

57）前掲56）②1-2頁。なお，着任した当初の担当講義名は「文明地理学」（明治40年度），「地理学史及文明地理学」（明治41年度），「人文地理学」「地理学講読」（明治42年度）であった。前掲56）③181頁，（無署名）「京都帝国大学文科大学史学科講義科目」史学雑誌19-10，1908，99頁，（無署名）「京都帝国大学文科大学史学科の近況」史学雑誌20-12，1909，111頁。

58）前掲9）①12頁，前掲56）②2頁。

59）米倉はこの研究内容について，「ラッツェルの『人類地理学』における集落地理の方法をわが国集落にあてはめて考察」したものと位置づけている。①米倉二郎『東亜の集落―日本および中国の集落の歴史地理学的比較研究―』古今書院，1960，47頁。ただ米倉は，ラッツェル地理学の方法が具体的にどの箇所で用いられているかについては述べていない。この「武庫附近集落の変遷」に限らず，石橋におけるラッツェルの影響に関する詳細な分析は今後の課題といえよう。なお手塚は，石橋と『人類地理学』との関係について石橋の受講生（別技篤彦）の講義ノートを事例に検討を試みており，興味深い。②手塚　章「戦前期わが国地理学界におけるラッツェル『人文地理学』の受容特性」人文地理学研究XIX，1995，139-

141頁。

60）①石橋五郎「武庫附近集落の変遷」（小田内通敏編『都市と村落（地人叢書）』地人学社，1914），1-16頁。なお，この論考は大正15年に発行された『西宮町誌』に再録されている。②西宮町教育会編『西宮町誌』，1926，447-454頁。

61）前掲60）①15-16頁。

62）前掲56）②2-3頁。

63）米倉二郎「輓近地理学界の動向と石橋先生」地理学談話会会報3（石橋博士還暦記念特輯），1936，45頁。また，米倉はその著書『東亜の集落』の中で，この研究を「西洋人文地理学とわが伝統的なる歴史地理学との巧みな統一」とも表現している。前掲59）①47頁。

64）京都帝大赴任以降の『歴史地理』掲載論考３本のうち，実質的な最後の投稿は明治41年１月の「地理学及其分科の名称に就きて」である。ただこの論考も，掲載されたのが『歴史地理』100号記念号であることを考慮すると，自発的なものというより日本歴史地理学会からの依頼原稿の性格が強いと考えられる。詳しくは前掲45）参照。

65）石橋五郎「九州地方聚落の人口地理的考察」（同編『小川博士還暦記念史学地理学論叢』弘文堂書房，1930），1035-1064頁。

66）前掲54）20-21頁。

67）石橋五郎・村松繁樹『集落地理学（修正版地理学講座　第九回）』地人書館，1937，８頁。なお本書は石橋と村松の共著であり，かつ担当箇所が明示されていないため，この引用文が石橋のものなのか村松のものなのかの判別は困難である。もっとも村松が京都帝大での石橋の教え子であることを考えると，仮に村松の文章であった場合でも石橋の思想を色濃く反映していると思われる。

68）前掲９）①５頁。

69）前掲９）①６頁。

70）石橋五郎「人文地理学概論（修正版　地理学講座　第五回）」地人書館，1937，30頁。

71）大正期以降の石橋については主に以下の文献に依拠した。前掲９）①1-23頁，前掲56）②1-12頁，③180-185頁。

72）神戸高商との兼任の終了時期について，石橋自身の回顧録や『京都帝国大学文学部五十年史』には大正11（1922）年に神戸高商との兼任を解かれて京都帝大専任になったとある。前掲56）②５頁，③182頁。しかし神戸高商側の資料によれば，石橋は昭和10（1935）年まで神戸高商の後身校にあたる神戸商業大学教授の地位にあった。神戸商業大学『神戸商業大学一覧　昭和十年三月』，1935，162頁。つまり，京都帝大退官時まで兼任を継続していたことになるが，この点については今後さらに精査する必要があろう。

73）織田武雄「石橋五郎先生の思い出」会報（復刊）３（京都大学地理学談話会），1992，２頁。

74）前掲73）２頁。「古代学」で知られる角田文衛も，自身が学生であった昭和９，10年頃の石橋について，「年中休講ばかりで，教授の姿を見たことすらなかった」と述べている。角田文衛「小牧実繁先生」（角田文衛編『考古学京都学派（増補）』雄山閣出版，1997），125頁。

75）（無署名）「石橋名誉教授の逝去」史林32，1948，162頁。

76）前掲９）①16頁。

77）石橋五郎・遠藤金英・田中秀作「近畿地方の人文地理」（山本三生編『日本地理大系第七巻　近畿篇』改造社，1929），423-455頁。

78）前掲54）20-21頁。

79）本研究では触れなかったが，石橋が歴史的方法による人文地理学に取り組んだ背景に自然地理学への対抗意識があったことも無視できない。地理学の本体は地人相関を基調とする人文地理学そのものであると考えていた石橋にとって，人文地理学を法則定立的な文化科学として確立していくことは大きな課題であった。この法則に迫る上で，地理的事象に対する歴史的説明や解釈は重要な役割を担っていたと思われる。前掲54）17-21頁を参照。